

# まんだら通信

第 232 号 (通巻 267 号)

平成 27 年 10 月 西暦 2015 年 佛曆 2581 年 皇紀 2675 年

安房国八十八ヶ所 第一番札所  
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口 1084  
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉  
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺  
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040  
<http://www.shiunji.org/>  
Mail post@shiunji.org

## お布施のこころ

日本とアメリカが戦争したことを知らないどころか、勝ったのは日本だと思っている人がいるという、ウソのようなホントの話がある近ごろです。『農地解放』など知らない人がいても不思議ではないかも知れません。

戦後まもなく、泣く子も黙る連合国軍最高司令官マッカーサーは、憲法や民法を始め、日本の社会制度の大改革に乗り出しました。

その一つが『農地解放』で、それまで地主さんに借りて農業をしていた小作農に、安い値

段で田畑を売り渡せという命令でした。随分無茶な話ですが、相手がマッカーサーでは逆らうことが出来ず、地主さんはみな没落しました。実は、お寺もその『被害者』でした。

紫雲寺が解放した農地は、田畑合わせて一町三分余りで、この白浜では五反歩あれば大きい農家でしたから、平均以上の地主といってい

いでしよう。お寺の田畑は『寺地』といいましたが、お寺が田畑を持っていたのは、どのような事情からでしょうか。

田畑を手に入れるには、僅かの収入の中から少しずつ蓄えたお金で求めるか、汗を流して一畝ずつ開墾するしかありませんから、金銀と同じ値打ちがある、とても貴重なものですね。その貴重な宝を「亡くなった両親への感謝を表すため」、「幼くして亡くなった可愛い娘の菩提のため」など、理由はさまざまですが、一筆一筆奉納したということは、並々ならぬ心がけだったということになります。

農地解放の前の寺地はお檀家が交代で耕作し、毎年小作料を届けてくれました。お寺の運営にあって小作料は、お弟子を育て、カヤ屋根の葺き替え費用や、住職の暮らしの一部になるなど、大事な財源になりました。昭和二十二年、マッカーサーの命令で、お寺が農地を持つことが

出来なくなりました。今と違って当時は、餓死者が一千万人出るだろう、というほどの厳しい食糧事情でした。そこで檀徒総会を開き、みんなで相談して次のように申し合わせました。

命令ではあるけれども、お寺の田畑に変わりはないので、家庭の事情が厳しい家から順に分けることにするかわり、お寺の都合で返して欲しいといわれた時には、無条件で応ずること。買手が支払うべき土地代金や、登記の費用はお寺が負担することとしました。

このように名義は変わったけれども、実際は今までと同じように、小作料に当たる金額をお寺に納めました。この取り決めは紫雲寺だけでなく、長福寺・石戸寺・観乗院など大体同じだったと思います。

時代が変わって日本中が経済的に豊かになり、それぞれのお寺の建て替えや改修をする時、名義人の皆さんは快く返納してくれて費用に繰り入れることが出来、今見るような立派なお堂になりました。

仏教で大事なことに『六つの波羅蜜』という実践項目があります。人間として行なうべき決まりを守ること、耐え忍ぶ心構え、努力を怠れないこと、こころを静かに保つことなど、色々ありますが、その中で一番大事なことは『布施』です。

やさしい微笑みや、思いやりに満ちた暖かい言葉、災害に遭った人へのボランティアも、すべて立派な布施ですが、財産の布施は形が見えるだけに特に印象が深いものです。

もとの寺地だけでなく、他にもご先祖のために、田畑や宅地を奉納する人がおいでになり、面積にすると今では五反歩ぐらいいになります。

但しお寺が所有できないのは今も同じです。世話人さんたちと相談して住職名義になっていきます。やがて住職が交代すれば、次の住職が名義を引き継ぐことになるでしょう。

上の写真は、土地の中村カメラマンに頼んで、写して戴いた今年の施餓鬼会の様子です。宗教を問わず、紛争や飢えで亡くなった人たちが救われますようにという法要で、これも布施の行の一つの形ですね。

ほかに、長い間のお寺と地域の関係があります。一千年前、質素な暮らしをしていた中で、地域の人たちはお寺を造り、本尊様を安置して大切に守ってきました。雨漏りしないように屋根を葺き替え、建物を修理して今に伝えてくれました。お陰様で平安仏がいらっしやいます。これも、紛れもなく大きな布施ですね。

## 田舎を元気にするには

TPP(環太平洋戦略的経済連携協定)が、漸く決まりました。やがて関税がなくなると、日本の農業が大変なことになるから、地方の活性化を含めて政策を考える、と安倍首相が言っています。

先月の余滴にも書いたことですが、「日本の農業は、補助金漬けで金食い虫だ」と言われていますが、この数字をごらん下さい。(三橋貴明 10月号)日本農業の所得に、税金から支払う割合は15%。ヨーロッパは90%以上、アメリカの穀物類は50%以上と、その開きは補助金漬けどころか、先進国の中で最低です。

安倍さんはこの点を充分に頭に入れ、政策を実行してもらいたいと思います。そもそも今のように、耕作しようにも費用がかかり過ぎて荒れるに任せる、という状態が異常だと思わなければ、耕作面積を大きくして価格で対抗するのではなく、家族で働けば暮らしが出来る、という昔のような考えを取り入れれば、豊かな自然の中で伸び伸びと子育てしたいという若い人が増えてくると思えます。

漁業や牧畜、山林も同じことでしょう。これで離島に人が帰ってくれば、国の安全保障に力強い味方が出来ますし、棚田が再生すれば観光資源になります。



# にっぽん人情小噺 三遊亭鳳豊

## 第一一七話 姉

よく、人は亡くなる時に、奥さんや家族に「ありがと」と言ってお別れをすると言います。必ずしもそうではないようですがね。

先日、こんな話を聞きました。

あるおじいちゃんが、病院のベッド脇で付き添っているおばあちゃんを手招きしたそうなんです。「え、なに、どうしたの？」「シッ、そんな大きな声を出したら、隣りの人に聞こえるじゃないか」「はいはい。なんですか」

すると、おじいちゃんは、おばあちゃんの耳元でこうささやいたそうです。

「わしは、もうすぐ死ぬ。自分のことはよくわかる。そこで、ひとつ、わしが死んだら、お前にどうしてもやってほしいことがあるんだ。一生のお願いだ」

おばあちゃんは、おじいちゃんあまりに真剣な目に、思わず驚いて、「はい、言ってください。出来ることでしたらなんでもいたしますから」と、あたりをうかがうように小声で言った。

すると、おじいちゃんは、手を合わせ、こう言った。「わしが死んだら、わしの骨をわしが生まれた所に埋めてほしい……」

おばあちゃん、まったく驚かず、平然とこう答えたそうですよ。

「はいはい、わかりましたよ。あなたが生まれた北千佳（東京の下町）に埋めればいいんですね」

今日は、宮崎で本当にあった話をしましょう。

宮崎市に住む高野貴美子さん（仮名）のお母さんは長い間、自宅療養をしていたのですが、やがて死期が迫ってきました。腹水がたまり、おなか膨張し、排尿もままならぬ状態でした。末期の腸管ガンでした。

「お母さん、もういっぱい話したよね。でも、よく大正、昭和、平成と生き抜いたわね」と言

うと、お母さんは天井を見ながら、小さな声でこう言ったそうです。

「あつと言つ間の人生だった」と。貴美子さんはその時、長い長い八十八年の人生だったはずなのに、母にとっては、「あつと言つ間」なのかと思つたそうです。

そして、痛み止めの座薬を挿入してあげてもなく、お母さんの意識はなくなり、翌朝亡くなったそうです。

実は、話はこちらからはじまるのです。

無事に葬儀も終わった二ヶ月後、貴美子さんのお姉さんから電話がありました。

「貴美子、大変、私たちにお姉さんがいるらしいのよ」「えっ、私たちのあちゃんになる前結婚してたつてこと？」「どうする？」「会ってみようよ」

自宅療養を何年もし、たくさん話したはずなのに、ほかに子供がいるなどという話は一切出てきていません。にわかには信じられませんでしたが、たいして遺産もない家だから、遺産目当てでもないだろうと思ひ、貴美子さんはお姉さんといっしょに、とにかくその女性と会ってみることにしました。

その女性は六十代半ば。貴美子さんとは七歳ちがいでした。

その女性は、宮崎県のかなり山のなかの寒村に、ひとり暮らししていました。いまだき珍しいトタン屋根の朽ち果てかけた小さな家でした。家の前には野菜畑がありました。かなり貧しい暮らしをしていることがわかりました。

しかし、貴美子さんとお姉さんは、ひと目でその人が自分たちの姉であることがわかったと言います。なぜなら、ふたりの目の前に現れたその容姿が、若き日のおかあさんに瓜二つだったからです。

事情を聞いて、真相がわかりました。貴美子さんのお母さんは、貴美子さんの父親と結婚する前に、一度、結婚していたのです。しかし、嫁いだ農家の姑との折り合いが悪く、まだ小さかった女の子を残して、家を出たのです。いや、貴美子さんから見れば、お母さんは

無理やり離縁され、家を出されたようです。

その女性は、ふたりに鬼のような形相で睨みつけていました。「かあちゃんは、私をほったらかして……あなたたちだけ幸せだったのね」と激しい口調で言うのです。

亡くなった父親は、その後、再婚をせず、彼女を育ててくれたのですが、自分の妻のその後をずつと調べてあつたそうです。「何度、あなたの家の前に立ったか。かあちゃんとその胸に飛び込んでいきたいと思つたか。でも、あなたたちの明るい声を聞いて、またトボトボと山道を戻ってきた」と怒るのです。

貴美子さんはその時、父のちがう「お姉さんに向かって、やさしくこう言いました。

「お姉さん、今日はこれで帰りますが、お姉さんが昔、私の家の前に立っていたように、今度は、私がお邪魔してもいいですか。家の中に入れてくれますか」

意外な申し出に驚いたのか、「お姉さん」の眉間の深い皺が消えました。

それから、数日後、その廃屋に貴美子さんの姿がありました。貴美子さん、本当に、ひと月一回のペースで通ひ、彼女のその後の人生をただひたすら聞いてあげました。お母さんのいない生活、小学校時代の辛かったこと、お正月の話、父の死、見合いで結婚、子供ができた話、夫が早く亡くなったこと……。「どうだい、うちの畑のほうれんそう、帰りに持っていくかい」

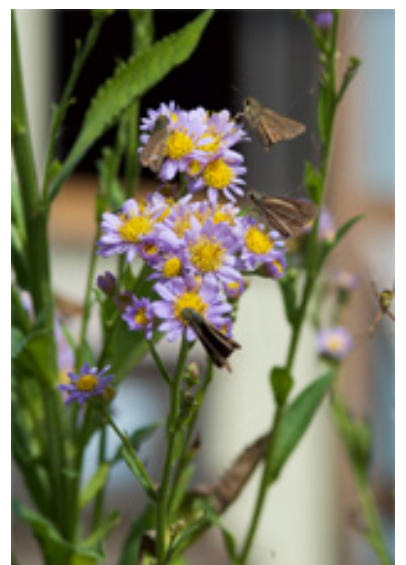
貴美子さんが行くたびに、泥のついた野菜を新聞紙にくるんで、持たせてくれた「姉さん」は、それから五年後に亡くなったそうです。奇しくも、死因は腸管ガン。お母さんと同じでした。

自分に比べて、幸せ薄かった父ちがいの「姉さん」の、いつも別れ際に言った言葉がいまでも、貴美子さんの耳に残っています。

「また、来てなあ、また、来てなあ……」頭にかぶった手ぬぐいを振って別れを告げるその時の「姉さん」の顔は、優しくお母さんの顔とそっくりだったそうです。

とて思えて仕方ありません。でも、もうそろそろ「あれが足りない、これが不足だ」というのは、特にお年寄り控えるべきだと思っています。これ以上、若い人たちにしわ寄せをするのは不人情だと思うのです。▼今月の野草。シオン【キク科シオン属】漢字で紫苑。中央アジア原産で、平安時代には日本に渡ってきていたそうです。何故かイチモンジセセリの好物で、どこにいたのかと思うほど沢山集まってきました。30年以上前、龍岡の本橋川端のご主人が、わざわざ植えていってくれた苗の子孫です。

2015.10.09 龍涉



- ▼青空の色が秋色になりました。つい先日までキンモクセイの香りが庭いっぱい漂っていました。
- ▼ご存知でしょうか、『ふるさと納税』。関心のある地方自治体に寄付すると、確定申告の時、大部分が所得税から差し引かれます。出来れば、生まれ育った自治体に寄付したいものですね。
- 自治体によっては、高額な「お礼」を出しているところもありますが、私はそのように下心丸出しの物欲しげなやり方は好きになれません。南房総市はそのようなことがないので気に入っていて、少しですが今年も寄付しました。
- 寄付の口数が増えれば、市長さん初め、働いている皆さんが元気づくのではないのでしょうか。
- ▼眼鏡橋わきのほころのおさい銭を、勿体ないからと小笠原さんの奥さん達が届けて下さいました。千葉銀で数えてもらったら、殆ど1円玉でしたが674円ありました。有り難く紫雲寺の口座に記帳しました。
- ▼ついと言うわけではないのですが、施餓鬼会の経費（塔婆代、お坊様方へのお布施、茶菓子や花、その他）を差し引いた残り、29万8千円も記帳しました。
- ▼日本ほど社会福祉が進んでいる国は珍しいと思います。本来はそうであるはずの、共産主義の国以上だと思ひます。皮肉に聞こえますが、共産党や社会党が政権をとれないのは、自民党が先取りしてしまったせいでは

### 余滴



































